令和２年３月号

みよし文化財だより

発行：文化財保護課（歴史民俗資料館）　電話 049-258-6655

「みよし文化財だより」は文化財保護課（歴史民俗資料館）が作成する不定期刊行物です

黒曜石（こくようせき）の石器が見つかった！ Part.2

今から約３万５千年前～約１万６千年前の**旧石器時代**（きゅうせっき）。当時の人々は、生きていくために欠かせない道具である石器を作るため、加工しやすい**黒曜石**（こくようせき）をよく材料に使っていました。しかし、黒曜石は入手できる場所が限られていて、関東周辺では長野県の霧ヶ峰（きりがみね）・北八ヶ岳（きたやつがたけ）地区、栃木県の高原山（たかはらやま）地区、神奈川県の箱根（はこね）地区、伊豆半島の柏峠（かしわとうげ）地区、神津島（こうづしま）地区など数か所でしか手に入りません。

そんな黒曜石で作られた石器が、三芳町の遺跡からたくさん見つかっています。今回は、その様子を詳しくお伝えします。

■ 黒曜石製の石器が大量に見つかった、中東（なかひがし）遺跡

町内の中東（なかひがし）遺跡（『文化財だより』令和２年１月号裏面地図の 20 番）では、約３万３千年前の地層から、黒曜石で作られた石器が約 1,400 点も見つかりました。さらに注目すべきは、これらの石器がたくさん接合し、石器を作る前の石（原石（げんせき））の大きさがわかるほど復元できるものがいくつもあったことです。

▲ ナイフ形石器とよばれる石器。主に槍の先に付けたり、包丁のようにして使っていました。縮尺 1/2。

◀ 石器 47 点が接合。原石は長さ約 13 ㎝の大きさであることがわかりました。原寸大。

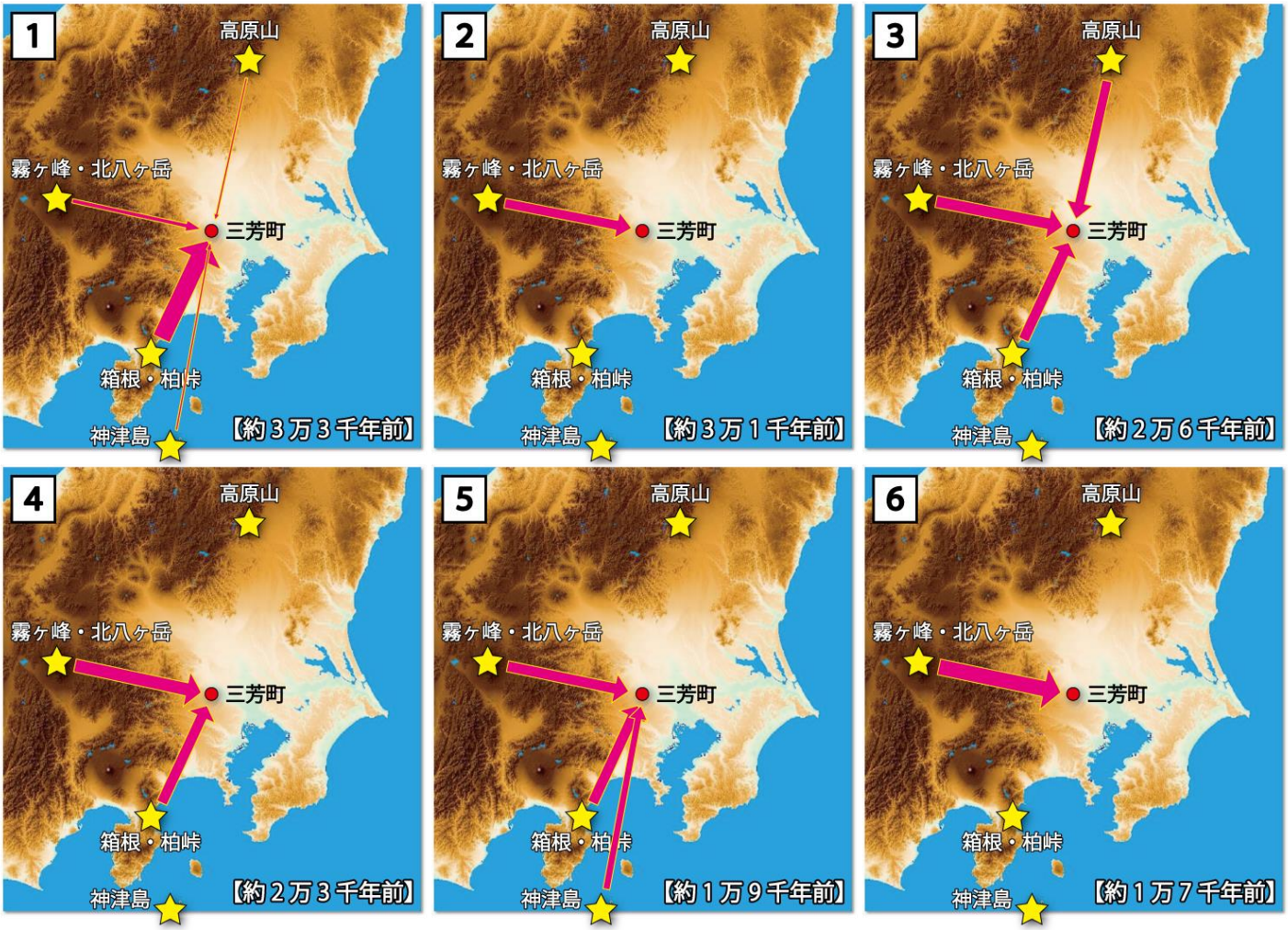
※ 掲載した石器は全て資料館で展示しています。約３万３千年前の人々が手にしていたキラキラと黒光りするその輝きを、ぜひみなさんの目でご覧ください。

■ 中東遺跡の黒曜石はどこからきたの？

では、これらの黒曜石はどこから持ってきたのでしょうか。蛍光（けいこう）X 線分析という方法を使って調べたところ、約 1,400 点のほぼ全てが伊豆半島の**柏峠産**（かしわとうげ）であることがわかりました。直線距離でも 100㎞ 以上離れた場所で手に入れた黒曜石を、三芳の地まで持ち込んで石器づくりをしていたことがわかったのです。

■ 黒曜石の来た道

ところで、三芳町周辺に持ち込まれた黒曜石は柏峠のものだけなのでしょうか。旧石器時代（約 3 万 5 千年前～約 1 万 6 千年前）の黒曜石で作られた石器の中から、三芳町 672 点、ふじみ野市 79 点、富士見市 55 点について蛍光 X 線分析を行ったところ、様々な産地の黒曜石が、時期とともに変化しながら持ち込まれていることがわかってきました。



※ 矢印の太さは、持ち込まれた黒曜石のおおよその量を表しています。

なぜ黒曜石の産地が時期とともに変化するのか。はっきりとした答えはまだわかりません。しかし、約 2 万年という長い年月の間に、火山活動や地形・気候の変化は当時の人々の生活に大きな影響をおよぼしていたことでしょう。遠くから運ばれてきた黒曜石を見ていると、私たちよりはるか昔に三芳で暮らした人々の姿がおぼろげながら浮かんできます。

なお、広報みよしの『みよし歴史探訪』では、4 月号より「発掘現場からよみがえる、太古の三芳」の連載が始まりました。こちらもどうぞご覧ください。（文：大久保）